

2021年度 博士学位申請論文

単語集と日本人：
受験用英単語集確立までの日本における英語語
彙学習教材編纂史

指導教員 高橋里美

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科
異文化コミュニケーション専攻博士課程後期課程

学生番号 17WV001F

熊谷允岐

論文の要約

本研究では、わが国において編纂された英単語集（以降、単語集）の歴史的変遷を、長期的な視点から包括的・系統的に辿り、受験用単語集の成立とその拡大にどのように結びついたのかを明らかにすることによって、単語集という観点から日本人の語彙学習に対する向き合い方を捉え直し、日本人と単語集の関係性を探究することを目的とする。現代のわれわれが「単語集」ということばを聞くと、受験との結びつきを想像するかもしれないが、わが国における単語集の歴史は、受験制度が成立する以前から存在していた。では、いつ、なぜ、どのようにして、受験と単語集は結びつきを強めるに至ったのか。また、それ以前において、単語集は日本人にとってどのような存在であったのか。本論文では、以下の4点を調査課題として設定し、われわれと単語集の関係性を改めて捉え直すべく、わが国における単語集の変遷を辿ることとした。

1. 各時代の単語集は、どのような目的・理由から編纂されたのか
2. 英語の語彙を学ぶため、各時代の日本人はどのような単語集を編纂したのか
3. 各々の単語集から垣間見える、日本人の語彙学習に対する創意工夫にはどのような点が見られるのか
4. 各時代の日本人にとって、単語集とはどのような存在であったのか

単語集の歴史は江戸時代から始まった。外国からの侵略的行為によって英語学習の重要性が強く認識されたことで、わが国では単語集の編纂が始まったが、その目的は当然国防のためであった。当時の外交に関わる日本人は、命と隣り合わせの状態では英語学習、ひいては語彙学習に努めていたのである。その時に編纂された単語集の見出し語は、分野別に配列され、カナ発音と訳語が付されるという簡素なものだったが、英語学習が手探りの状態であったその当時においては、精一杯の創意工夫であったに違いない。だが、特にカナ発音には問題が多く、単語集を学んでも中々正しい発音を習得することは困難であったと思われる。それでもなお、最初期の単語集は国防に携わる日本人にとっての重要な英語学習教材の一つであったと言えるだろう。

黒船来航に伴い日本各地に開港場が設けられるようになると、貿易が盛んとなり、外国人の来日も増加したことで、英語学習の必要性が一般庶民にも広がった。すると、単語集

もまた国防という限られた目的から、一般庶民の生活の一端を支えるという目的にまで拡張されて編纂されるようになった。だが、この当時はまだ、受験との結びつきとは皆無なところに、単語集は存在していたのである。

明治時代はその存続の長さゆえに、語彙学習の目的や単語集の内容にも大きな変化が生じた。明治前半は、政府が西欧の列強に追いつくことを目標に掲げ、西洋文化の摂取を強く推進した。教育機関も拡充され、英語学習が重視されるようになった。当時の日本人の英語学習の目的は、英語の原書を読みこなし、西洋の新しい知識を吸収するという教養的価値と、商いなどを通して外国文化に触れるという実用的価値の2つに支えられていたが、その根本は一致しており、それが「西洋文化の摂取」であった。語彙学習に当てはめた場合、語彙を通して異文化に触れ、世界を理解することがそれにあたる。明治前半の単語集もまた、語彙を学んだ先にある異文化理解を促すものとして主に存在していたといえよう。

当時の単語集がどのようなものであったかという点、江戸時代に編まれた単語集の特徴を引き継ぎながらも、その多様性を広げていた。特に、2度の大きな英学ブームによって単語集の編纂は最盛期をむかえた。だが、単語集の多様化は同時に編纂者の多様化を意味し、彼らの英語力や知識によって、単語集の質が左右されることがあった。模倣版や海賊版に類するものが多く出回るなど、単語集の質を低下させるような事態も生じた。ゆえに、明治前半の単語集は氾濫と同時に飽和の道を辿っていったと言えるが、このような歴史を経たからこそ、日本人に単語集が定着するに至った事実は見逃すことができない。

明治後半を迎えると、日本人の英語学習に対する目的が変化した。日清・日露戦争の勝利を経て、国力が充実してくると、明治前半の目標であった西洋文化の摂取が不要のものとなってきた。明治後半は、「なぜ英語を学ばなければならないのか」という問いに対する共通認識が希薄化していったのである。すると、英語は課目や学問の枠組みの中で学習・研究される対象へと変わり、英語の語彙教授や学習法の研究もまた、盛んに行われるようになった。

一方、単語集の編纂は明治後半になるとその勢いを弱めていった。ただし、先行書の影響を強く受けていた明治前半の単語集に比べて、明治後半に編纂された単語集は独自性の高いものが多かった。例えば、これまで以上に特定の分野の語彙を徹底して収録したもの、見出し語の配列に新たな工夫を加えたり、語法の表記を取り入れたりしたもの、類義語の差異に焦点を当てたもの、渡米を目指す学習者向けに特化したものなど、明治前半ま

でに生じた単語集の飽和化を打破しようとするかのような編纂姿勢を読み取ることができた。全体的として、明治後半の単語集は大正以降、ひいては現代の単語集を彷彿とさせるような内容へと変わっていった。

受験に特化した単語集も、明治後半から登場した。受験用単語集の目的は、入学試験を突破するための語彙力を習得させることで、明治前半の単語集に見られたような、異文化理解を企図していたわけではない。ゆえに、受験用単語集もまた、日本人の英語学習に対する目的が変容したがゆえに生じた産物の一つであろう。このように考えると、異文化の摂取を目的とした単語集が多かった明治前半に比べて、明治後半の単語集は日本人にとって、特定の目標を達成するために用いられる教材として編纂される傾向が強まったと言える。これは、明治前半に生じた単語集の大衆化とは逆の現象が生じたという意味で注目される。

大正時代を迎えると、単語集はさらに限られた目的の中でだけ、盛んに編纂されるようになった。それに深く関係していたのが受験である。受験用単語集の成立は明治期であったが、その拡大は大正時代から始まったのである。大正期において、受験用単語集の存在が顕著となるに至った経緯には、当時の歴史的背景が複雑に関係していた。明治維新以降、わが国の教育機関において一定以上の質を担保した教育が行えるようになると、教育機関同士の接続も円滑化し、高等学校、ひいては帝国大学を目指す若者が増加した。すると、それに伴い2つの事象が生じた。受験競争の激化と学生の英語力低下である。前者は主に受験用単語集の「量」に影響を及ぼし、後者は主に受験用単語集の「質」に影響を及ぼした一要因だと思われる。元来、語彙を記憶するために編纂されていたのが単語集であったことを踏まえると、入学試験の競争率が高まるにつれて、受験英語の語彙対策にも注目が集まり、それらに対応する単語集もまた盛んに編纂されるのは当然の成り行きであろう。他方で、学生の英語力低下は、英語教育に対する反省と焦り、ひいては改善に対する努力に繋がり、当時の単語集の質の向上にも寄与したと考えられる。実際に、大正時代の単語集は従来以上に合理的かつ体型的な工夫が施され、現代の単語集にも通ずる特徴がしばしば見られた。特に、わが国の単語集の質を向上させるに至った最たる例は語彙選定であった。「どのような語彙を優先的に学ぶべきか」という問題意識を明確にして調査を行う根底には、語彙学習の「効率性」への追求が含まれていたと考えられる。この効率性の追求が、受験英語の性質と結びつきを強めるきっかけの一つとなったのであろうが、いず

れにせよ、単語集の質の向上に結びついたのは確かであり、各編纂陣の意欲と叡智は評価されて然るべきであろう。

わが国における単語集の歴史は約 200 年で、受験用単語集の確立という点からすれば、直接的な関連性を有しているのは後半 100 年の歴史、すなわち明治後半から大正時代に編まれた単語集である。だが、これは前半 100 年の単語集の歴史が、無関係に存在していたことを意味するわけではない。第一に、単語集が全国の英語学習者にまで普及したのは、江戸時代から明治前半にかけての出来事であった。このように、単語集が語彙を学習するための一つのツールとして認知されるようになったからこそ、受験英語の需要が高まった際に、互いが結びつくことに至ったと考えられるのである。第二に、受験用単語集（大正期の単語集）の質が高水準であった事実もまた、過去の単語集の歴史と決して無縁ではない。わが国では西洋文化の摂取や異文化理解を目指す中で、単語集もまた盛んに編纂されたが、その質は明治前半において既に頭打ちの状態となっていた。だが、このような状況にあったからこそ、教材に対する改善の機運が高まり、単語集の歴史が前進するきっかけが作られたとも考えられる。当然、学生の英語力低下や英語研究の隆盛などの要因も複雑に絡んでいたのであろうが、それらも長い歴史の流れにおいて生じたものであったことを踏まえれば、わが国における英語学習・英語教育の歴史の積み重ねによって、単語集の質もまた向上していったと考えて良いだろう。

現代の単語集は受験だけでなく、様々なニーズに合わせて編纂されているが、奇しくもそれらの多くは大正時代に編まれた受験用単語集の特徴と一致する点が多い。時に受験英語は批判の対象となるが、わが国における受験用単語集の確立が、長きにわたる単語集の歴史において非常に大きな役割を担っていたことは事実であり、同時にその功績が多大であったことは認識する必要がある。わが国における単語集の歴史には、多くの熱意と腐心、そして多大な労力が含まれていたことを、われわれは心に留めておくべきであろう。